

岸 辺

森岡 正作

鮎買ひて

縦 横 に 無 尽 に 島 の 鶯 は
錫 杖 の 僧 行 く 花 の 吹 雪 き け り
野 蒜 摘 む 地 縁 の 薄 く な る ば か り
四 の 五 の と 言 ひ て は 亀 に 鳴 か れ を り
啄 木 は 岸 辺 に 泣 け り 柳 絮 飛 ぶ
万 歩 計 信 じ て 春 を 逍 遥 す
微 睡 の 森 に 深 入 り 春 惜 し む

登四郎先生には川魚を詠んだ句が
少ない。少年の頃から川漁師気取り
だった私には残念に思われたが、や
はり鮎は別格なのか、十句以上ある。
例えば〈鮎買ひて家路へ心はずみ
つつ〉という句がある。内容は平明
であるが、最後の句集である『羽化』
に載っていることを考えれば、少年
の頃の思い出か、さもなれば、イメ
ージの世界かも知れない。
そんな中にある、〈鮎突きの湍に
抗す若き胴〉という句は、鮎の蘊蓄
にかけては誰にも負けない私の経験
からも、その状況を的確に詠み捉え
たものと驚く。瀬の中流の滾る流れ
を若者が、横向きの胴で受け止め、
川底の大きめの石を頼りに足腰を踏
ん張り、水中眼鏡でもって、上り来
る鮎を待ち構えているのである。き
つとその光景に見とれて佇む先生の
胸中も高ぶっていたに違いない。合
掌部落』所収で、飛驒を紀行中の作
である。